

住宅におけるウチとソトの間に生まれる空間に関する研究

ー ラオス低湿地帯のKL集落を事例として ー

Keywords

ウチとソト 中間的性質の空間 集団
住宅 表と裏 手前と奥



K08035 賀根 麻由美

1. 研究背景・研究目的

人が集まって暮らす際には、たとえば家族などが暮らす「ウチ」とそれ以外の「ソト」という概念が生まれ、それが建築空間にも反映されている。そしてそこには、2つの空間概念をつなぐ中間的性質の空間が生まれると仮定する。その空間は、自分の領域の中にありながら外に向かって開いており、人のためもしくは人に使われてもよいという発想で生まれた空間である。それが あることで、本来住宅は、集合することにより強いコミュニティをつくりだしているのではないだろうか。また、その空間が住宅の形式にもかかわり、共に暮らす人々の中に共通のルールのようなものを生みだす、あるいは維持する役割を果たしているのではないだろうか。

しかし、商品として買われた住宅にはその機能が薄れつつある。では、血縁・地縁集団からなる共同体の中の自然発生的住宅にはいまだにそれが存在しているのだろうか。「ウチ」と「ソト」の間に生まれる空間を分析することで、人々が形成する集団と住宅の関係性を明らかにすることを本研究の目的とする。

2. 研究方法

2011年8月26日から2011年9月18日の計24日間にわたり、ラオス低湿地帯の集落を対象にフィールドワークを実施した。調査では主に集落内における住宅の実測及びインタビューを行った。

3. 調査地概要

今回調査地としたKL集落は、ラオスの首都ヴィエンチャンから車で北へ3時間ほどのところに位置する。

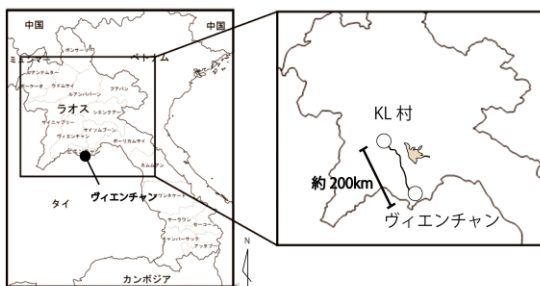


図1 調査対象地

住宅は70軒あり、約330人の人が暮らしている。電気はほぼすべての住宅で使用されていたが、ガスと水道は

なく、水は井戸水をひき、生活用水としていくつかの住宅で共有していた。便所や水浴び場は主屋とは別に、分けて外につくられている住宅がほとんどであった。

4. KL集落の空間構成

KL集落では一本の中心的なミチを挟んで南北に住宅が広がっている。そこに寺院、広場、学校、精米機、売店が加わり、ある程度自律した集落空間を形成している。現在KL集落にある住宅は、1984年から2011年に建設されたものであるが、2005年を境に急激に建設軒数が増加した。2005年以降に建設された住宅を集落図上に示すと中心的なミチが通るあたりに拡がりを見せており、南側にはほとんどないことがわかる(図2)。それに加え、集落の南側では中心的なミチが枝分かれし、集落の他の部分とはミチと住宅の関係が異なっている。このことから、点線で囲んだエリアにはじめに住宅が建ち、集落外部へのミチがしっかりしたものとなっていくと共に、周辺に住宅が立ち並ぶようになり、集落が拡大していったと考えられる。したがって、点線で囲んだエリアでは現在建つ住宅の古さとは別に、暮らし方において初期的、自然発生的な様子がみられるのではないかと考える。

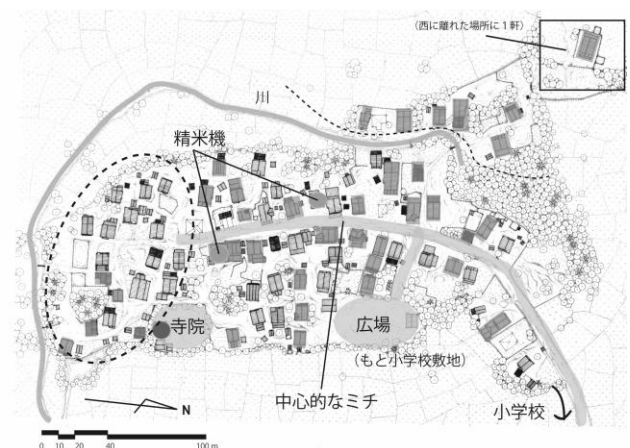


図2 2005年以降に建設された住宅と公共空間

5. 住宅の空間構成

KL集落における住宅の空間構成を考える上で、炊事場の位置は重要である。そこで本研究では、炊事場の位置から集落内の住宅を以下の3つに分類した。

- ①炊事場一体型：主屋の一部で炊事を行う住宅
- ②炊事場別棟型：主屋と炊事場が分かれている住宅
- ③炊事場分離型：主屋と炊事棟が隣接して建ち、行き来できるようにつながっている住宅

5.1 炊事場一体型（70軒中23軒）

炊事場一体型の住宅は、すべて高床式の住宅であった。主屋には寝る場所（寝室）のみに壁がつくられ他の空間と区別されているため、寝室が住宅の中で最も「ウチ」の性質が強い空間だと考えられる。ほぼすべての住宅において、向かい合った位置に入り口と寝室があることから、入り口側を手前、寝室側を奥と捉える事ができる。

寝室の位置の違いから、KL集落の住宅はさらに3つのタイプに分かれる（図3）。

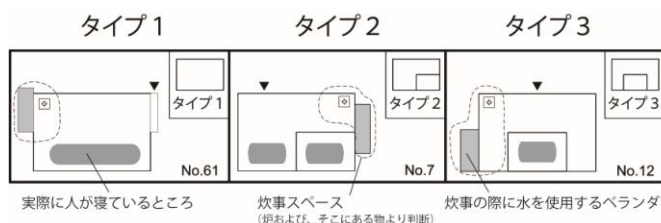


図3 寝室のタイプ

タイプ2はタイプ1よりも寝る人を分けたり、住む人が少ない場合に寝室以外の空間をより効率的に使うことができる。また、タイプ1とタイプ2では手前側に炊事スペースが設けられているのに対し、タイプ3では炊事スペースが主屋の奥側に拡大しており、寝室の左右の空間が炊事スペースと、場合によっては物を用いて空間を区切り寝室に変えられる空間になっていることがわかる。ここから、炊事スペースを炊事専用の空間、つまり炊事場として分けるという発想が生まれたのではないかと考える。

5.2 炊事場別棟型（70軒中21軒）

炊事場別棟型の住宅には、高床式の住宅、その床下部分をコンクリートブロックでつくった住宅（2階建て・1階ブロック）、コンクリートブロックまたはレンガでつくった平屋の住宅（平屋ブロック）の3種類が存在する。

別棟型の高床式は、一体型から炊事スペースをなくした形である。炊事場が主屋から離れたことにより、物が広範囲に置かれるようになった。また、ここに分類される5軒の住宅のうち4軒においてベランダがなくなっていた。これは、一体型の住宅において、炉の近くに調理や洗濯など水を使用する場所としてベランダが設けられていたのに対し、別棟型の住宅では調理を主屋でしなくなったためその必要性がなくなったからと考えられる。

2階建て・1階ブロックの住宅では、9軒すべてにおいて入り口が2つ存在し、片方の入り口で道から主屋に入り、もう片方で主屋から炊事場へと向かう。さらに9軒中7軒の住宅が2つの入り口を一直線上に持つ。このこと

から、炊事場は多くの場合で集落の中心的な道とは反対の側に位置し、寝室を奥とするならば、炊事場はさしずめ裏という表現がしっくりくるような位置関係になっていることがわかる。この奥と裏は、性質は異なれど、住宅内における「ウチ」を意識させる空間である。以下、道から主屋に入る入り口を表口、主屋から炊事場へと向かう入り口を裏口と呼ぶ。

平屋ブロックの住宅では、寝室が5.1で述べたタイプにあてはまらない例が複数みられた。

炊事場別棟型の住宅では、食事を運ぶ際に一度屋外に出なくてはならない。しかし、主屋と炊事場を行き来できるようにつなげることにより、その問題は克服される。

5.3 炊事場分離型（70軒中23軒）

炊事場分離型に属する住宅にも、高床式、2階建て・1階ブロック、平屋ブロックの3種類が存在する。そして、分離のしかたが、主屋と炊事場を材でつないでいる住宅（あ）、主屋と炊事場を隣接して建てている住宅（い）、炊事場を内包する住宅（う）の3種類が存在する（図4）。

（あ）では外に出なくても主屋と炊事場の行き来が可能になった。（い）は炊事場が分離しているため、炉の煙が主屋に入りにくくなっている。しかし、炊事場と主屋の行き来きは自由にできるため、二つを合わせて一つながりの空間として使用できる。さらに、ドアがついている住宅では、完全に空間を分離することが可能となっている。（う）は、主にコンクリートブロックを建材として使用している住宅にみられた。一体型との違いは、主屋の中でその場所が炊事のための空間として意図的に壁で区切られているところである。

以上の分析から、一体型→別棟型→分離型あ→分離型い→分離型う（内包型）へと住宅の形式が変化し、多様化していったのではないかと考えられる。また、同様に住宅のつくりやタイプからも、集落内の住宅を比較することで、変化の過程を読み取ることができる（図4）。

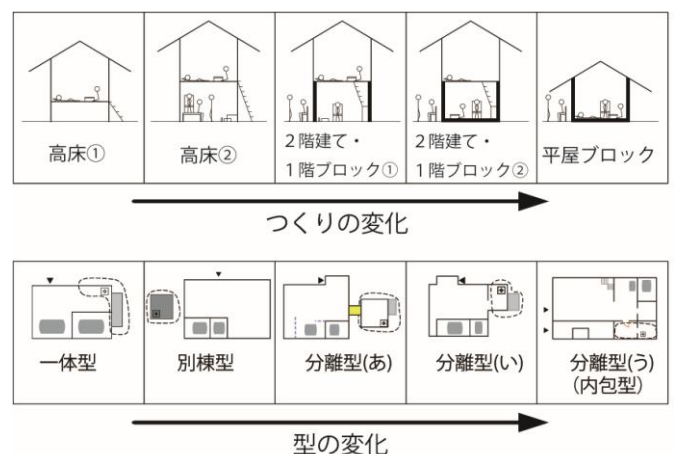


図4 住宅のつくりおよび炊事場の位置からみえる変化

変化のプロセスの中で違う段階にある住宅が、同じ集落の中で、同じ時間にも存在することから、現在

KL集落が様々な物や人や情報を受け入れ、変化の過渡期にあることがわかる。

6. 空間と人

人が集まって暮らすとき、そこには住民同士で共有される暗黙のルールのようなものが生まれる。そのルールが住宅の形態や空間の使い方を決定する大きな要素であると言える。そこで、寝室とそこに寝る人の関係、接客空間の2点に着目し、暮らし方と住宅の関わりについてさらに分析を進めていく。なお、本項では途中、「4. KL集落の空間構成」において点線で囲んだエリアに建つ14軒の住宅を対象を絞り分析を行う。この14軒に関しては、インタビュー調査より寝る際の並び方、食事と接客時の位置及び座り方、大切な柱の位置まで把握することができた。

6.1 寝室

寝室の話をする前に、「大切な柱」の存在について簡単に述べる。KL集落の住宅には、構造的な視点とは別に「大切な柱」を持つ住宅が存在する。以下にそうした柱の名前をいくつかあげる。

Sao kok (一番の柱/最初に建てる柱)

Sao k(h)wan (魂/建設時最初に建てる柱)

Sao kam (支える柱/一番の柱)

上記したように、大切な柱といっても様々な名前を持つが、その柱の存在を住民が意識し、そのことが空間の使い方とどのように関連しているのかを調べたいため、今回はその明確な区別は行わず「大切な柱」という表現に統一する。なお、この柱は奥側かつ表側の端から2番目の柱であることが多い。

大切な柱の存在が確認された12軒のうち7軒が、柱の近くに年配の者が寝ており、柱から離れるにつれて若い者が寝る様子が見られた。さらに、10歳未満の子どもの寝る位置を考慮に入れなければ、11軒の住宅でこの並びが守られていることがわかった。また、夫婦は同じ寝室で寝、その場合男性がより柱に近い位置に寝る。

一つの住宅に2世代以上が同居する場合は、基本的に寝室を分けている。また、およそ10歳を超えた子どもは親と共に寝なくなり、違う寝室や寝室の外で寝るようになる。この時、兄弟や姉妹で同じ空間に寝ることはあるが、兄妹や姉弟で同じ空間に寝ている例はほとんど見られない。

寝る向きはほぼすべての住宅で棟と垂直方向に、頭を奥側に向けて寝ている。亡くなると体を軒と水平方向に寝かせられる。これは、棟に沿って霊の通り道が存在し、棟側に頭を向けるとその霊が魂を持っていってしまうという考えがあるからだ。それは、日本における「北まくら」のようなものだといえる。そして、10歳未満の子どもは、霊に魂をもっていかれやすく、それを防ぐために、親と一緒に寝ているとされる。

6.2 接客空間

(1) 接客空間の位置

高床式の住宅では、接客空間が入り口から入り、寝室や炊事場などの奥や裏の空間へ向かう動線上に重なっているのに対し、2階建て・1階ブロックの住宅では接客空間が動線から外れている例が多くみられた。それは、2階建て・1階ブロックの住宅では、表口と裏口を結ぶ直線が2階の寝室の下を通らない位置、つまり手前側を通っているため、1階の奥側を人が通過することは少なく、椅子や机など、位置を固定する物たちもそこへ置かれるようになるからである。

「5. 住宅の空間構成」で住宅内における手前と奥、表と裏の概念について述べたが、接客空間も同様に、特定の位置を持つのかを探るために14軒の住宅の略図面上に大まかに「手前・奥・表・裏」の軸を描き、接客空間がどこに位置しているのかをプロットしていった(図5)。

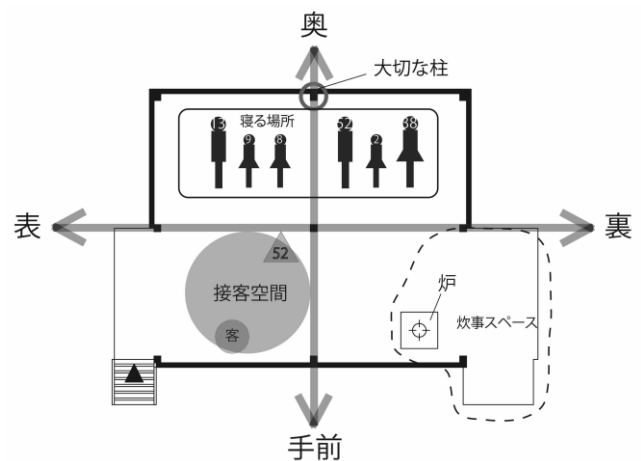


図5 手前と奥および表と裏に関する考察

その結果、ほぼすべての住宅において手前側かつ表側の空間を接客の際に用いていることがわかった(表1)。

表1 手前と奥および表と裏に関する考察

住居No.	客の位置	入りの位置	炉の位置	大切な柱の位置	型	タイプ
45	○	○	○	大切な柱なし	一体型	3
46	○	○	○	○	一体型	3
47	○	○	○	○	一体型	3
51	○	解釈○	×	○	分離型	3
52	○	解釈○	○	不明	分離型	2
53	○	○	○	○	一体型	3
55	○	×	○	○	分離型	3
56	×	解釈○	○	○	一体型	3
57	○	解釈○	×	○	分離型	2
58	○	○	○	×	一体型	2
59	記述なし	○	○	○	一体型	1
60	△	○	○	○	一体型	3
61	○	○	○	△	一体型	1
62	○	解釈×	○	○	分離型	2

※主屋のつくりは
すべて高床式

・客/入りの位置: 「手前かつ表」に一致している場合○
・炉の位置: 「手前かつ裏」に一致している場合○
・大切な柱の位置: 「奥かつ表」に一致している場合○
(※解釈とは、高床の階段下を住宅の入り口として解釈する場合)

つまり、この接客空間こそが住宅の内部で最も外部と関連づけられる空間であり、住宅の内部にありながらも「ウチ」と「ソト」の間という性質を兼ね備えた空間なのである。

(2) 接客時の座り方

さらに分析を深めるために、接客時の客と家人の並び方について考察を行う。

客と家人が対面する際、14軒中客人と家人の座る位置が読み取れる11軒すべての住宅において、家人が奥側に座り客が手前に座る形になっている。さらにそのうちの8軒には大切な柱が存在し、さらにそのうちの5軒の住宅で、大切な柱→家人→客という順に一直線上になっている。つまり、大切な柱のある側を背にすることで家人が客に向かい合っているのである（図6）。

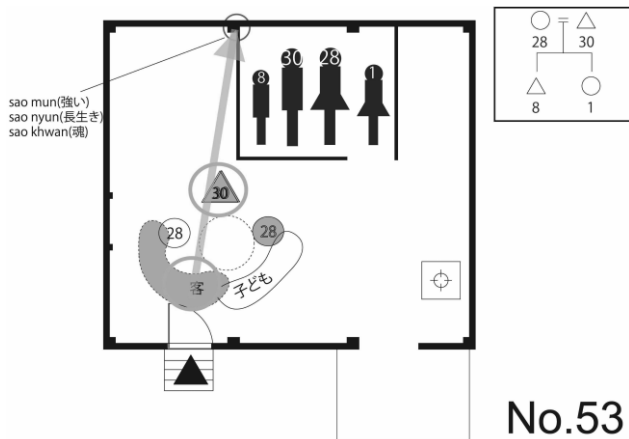


図6 大切な柱と家人と客の位置関係

また、食事をする際の座る場所と接客時の座る場所を比較すると、食事の場所と接客の場所が同じ住宅が6軒存在した。食事の座り順には寝る時と同様に、並び方のルールがみられる。食事は竹で編んだ丸い台の上に載せて炊事場から運び、それを住人が囲む形で床に座り食べる。その時の並び順は、まず、最奥側に年長者の男性が座り、その左右どちらか（裏側の場合が多い）にその妻もしくは母などが座る。基本的に、共に暮らす人々の中で、若い者よりも年配の者、女性よりも男性がより奥に近い位置に座ることが多い。つまりその座る位置から、年配者がより敬われるべき存在であること、女性よりも男性が上位とされていることが推測できる。一方で、10歳あたりまでの子どもは男女の区別はあまりなく、入り口付近に並んで座る例が多い。

ここで、接客の際の客の位置が食事の際に子どもたちの座る位置と6軒中5軒で完全に一致していることに注目したい。家人は客人をむかえる側でありながらも、位置関係では客人よりも上位を示す位置に座っているのである。また、客人どうしの並び方にも、年配の者ほど奥に座り、若い者ほど手前に座るというルールが共通して存在していることがわかる（図7）。

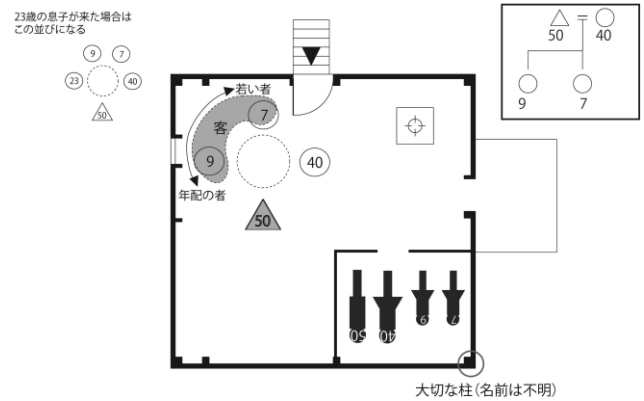


図7 客の並び方と食事の並び方

7. 住宅外部における「ウチ」と「ソト」をつなぐ空間

接客空間は、住宅の内部で「ソト」との関わりをもつ空間であった。それに対し、住宅の外部において「ソト」との関わりをもつ空間が存在する。それが高床式の住宅の床下や、コンクリートブロックを使用した住宅の玄関先である。

高床式の住宅は全部で46軒あり、うち34軒で人が立ち入り床下を利用できるようになっている。床下の空間の使い方としては、家畜を飼う、乗り物や建築資材などを置く、作物の保管をするなどが挙げられる。しかし保管場所としての機能以外にも、機織り機が置かれ、生活を行う空間の一部となっていることがわかる。また、床下に台や腰をかける場所を設置している住宅が26軒あり、そこに人が集まり談笑している様子が集落のいたるところでみられた。

一方、2階建て・1階ブロックおよび、平屋ブロックの住宅は全部で24軒あり、うちコンクリートが打たれ玄関先が利用できるようになっている住宅が15軒存在する。さらに机やイスやクッションを置き、積極的に玄関先を利用しようとしている住宅が11軒あった。

このように、KL集落では住宅形式が変化し多様化している中でも、床下から玄関先に場所を変え、台からイスや机に形を変えて、人が集まり交流の場となる機能を持続けていることがわかる。

8. おわりに

KL集落の住宅では、「ウチ」と「ソト」の間の空間が、住宅の内部と外部にある。それを指標にすることで、家族、客、他者などの存在をみるができるのである。そこから、住宅がコミュニティ形成へ果たす役割を今一度見つめ直すことができる。

参考文献

- 1) ラオス文化研究所 編『ラオス概説』、めこん、2003。
- 2) 地球の歩き方 編集室 編『ラオス〈2011~2012年版〉地球の歩き方』、ダイヤモンド社、2011。